MINATO TOKYO

Bulletin みなとユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY／MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004／MITSUKO TAKAI PRES.
発行所／港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL・FAX 03（3434）2233 発行人／高井光子

2010年9月1日発行　第121号

目　次

P 1　巻頭言「始めて学んだ事」
P 2-4　国際理解講演会「パキスタンの歴史・文化・くらし」
P 5　世界の味文化紹介「インドネシアの家庭料理」
P 6-9　UNESCO ユースフォーラム in みなと
P 9　浴衣着付け体験教室
P 10　新入会員を囲む会
P 11　MUA サロン「私の自然染め」、ミンダナオ子ども図書館支援
P 12　追悼文、　事務局便り

初めて学んだ事

港ユネスコ協会名誉会長　三輪公忠

昔、「アリランは君が代丸に乗って」と題されていたかな、日韓併合後、主として済州島から朝鮮人男女が労働移民として日本本土に上陸してきたことを読んだことがある。そのときには彼等の運命がどんな事になったか、記憶に残るほどの深い印象は無かったように思う。ところが最近、人に勧められて初めて梁石日（ヤン ソ ギル）の『血と骨』を読んで、小説とはいえ、大きな衝撃を受けた。

主人公金俊平の暴力、セックス、正妻に構わぬ女遍歴。鬼のような極道ぶりは、そんな男が果たして居るものかと驚嘆する。しかし学んだことがある、1920年台の大阪には済州島から続々と働き者が移住してきた。日韓併合後のことである。

己が産ませた子供でも、女の子には見向きもしない、男子であれば、大枚をはたいて、学者先生に命名してもらい、母親から引き離して育てようとする。子にとって母親は「血」であり、父親からは「骨」をうけ、家名を負うという。しかし大酒を食らい、賭博に明け暮れてついつい子供の事も忘れ、餓死させたり事故死させている。

すべてが、初恋の廓の女を身請けしたつもりが、裏切られ逃亡されてしまったことが、心にわだかまっている。二〇年も月日が経て、肺結核を患い、今日明日のいのちと思われる状態のこの女に木賃宿で再会する。俺が直してやるといって連れ出し、山奥の捨てられた炭焼き小屋で、滋養になるものを食わせ、昼も夜も情欲だけは昔のように燃え滾るやせた女にふかくからみあう。女の色艶も元気になっていくように見えたのは幻だったのか。里で買い物をして帰り着いてみると、女は板の間に横たわり冷たくなっていた。

こういう激しい男がいるということが一つの驚きであったが、学んだ事というのはそれではなく、このような「大日本帝国臣民」の一人となった朝鮮半島からの移住労働者に雇用主や船会社がいかにあこぎにあたり、もともと日本人の半分以下の給料で使っていた者たちを、不況になれば真っ先に首を切り路頭にさまようようにし、独占している海運業は次々と船賃を上げ、彼等の3か月分の給料を片道の航行に巻き上げた。そこで、渡航者達からつのった出資金で自前の渡航船をせっかく出立させれば、今度は彼等がたちうちできない低運賃に値下げして破産に追い込み、また破格の運賃に値上げするのである。

これは大陸横断鉄道で競争路線を廃業に追いやって鉄道王に伸し上がったアメリカのハリマンに前例がある資本主義の競争原理と言えばそれまでだが、「徳治主義」を秩序原理にしていた中華帝国発の儒教文化圏で起こってみると、何かあまりにも生々しい偽善帝国の姿として、一読者にすぎないはずの私をたじろがせ、日本の植民地支配の実態を、本土大阪の巷で実体験させられたほどの恥ずかしさをおぼえるのであった。

（2010・4・17）

2010年度第１回国際理解講演会

「パキスタンの歴史と文化とくらし」

日時　2010年8月5日（木）午後6時30分から
会場　港区生涯学習センター305号室
講師　在日パキスタン大使館主席公使　**イムティアズ・アハマド氏**

猛暑の一日にもかかわらわず、40名の参加があった。受付には、大使館提供のガイド等多数の資料が並び、参加者はこれを手に入室した。

公使が同伴下さった民族衣装姿の奥様、港区立の幼稚園に通う二人のお子様も、会場にお国情緒を添えて下さり、ご家族総出での「パキスタン理解講演会」となった。
司会者から先のパキスタン大洪水のお見舞いを申し上げ、スタートした。

続いて、公使から「日本の母」と慕われている長門芳子理事から、公使のご経歴やお人柄等が、1989年12月の出会いからのエピソードを含めて紹介された。永年多数の若手外交官や留学生を宇都宮市においてお世話されておられる長門理事であるが、アハマド公使は特に「自慢の息子」とのことである。

公使は、パキスタン及び英国で修士課程を修められた後、外交官となられ、1988年8月に初来日。日本の外務省招聘事業で日本語を研修され、1989年から93年まで駐日パキスタン大使館三等、二等書記官を、1998年から2002年まで駐日パキスタン一等書記官を務められた。2007年9月から3度目の駐日で、現在、公使として駐日大使館ナンバー2のお立場で、我が国との外交にあたられている。この間、駐スウエーデン大使館一等書記官、駐韓国大使館参事官も歴任されている。

講演は流暢な日本語でご家族紹介から始まった。「テーマである『歴史と文化とくらし』について主なことを話したい。後で何でも質問してください。」と、持参されたスライドを使って、手際良くお話し下さった。

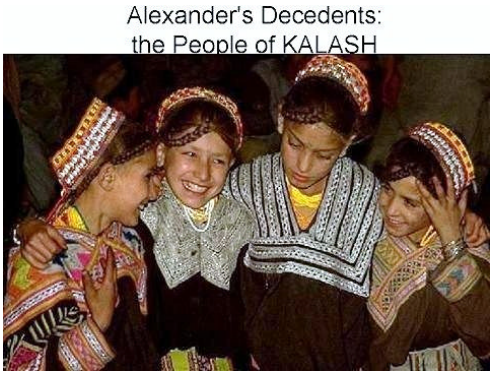
国旗　緑色はイスラムの聖なる色。緑は繁栄を、白は平和を表わす。三日月は進歩と発展、星は明光と知識を意味する。左の白い部分はイスラム教以外の少数派の国民をあらわす。
古くて新しい国。新しいパキスタンは、1947年8月14日、イギリスから独立した時から始まった。
国名は、Islamic Republic of Pakistan　**パキスタン・イスラーム共和国**
首都は、イスラマバード　独立時はカラチに首都があったが、人口増加のために首都移転した。
人口　17,000万人　現在の人口増加率は、1.8%。
パキスタン人は、原地人と中央アジアやイラン等々から来た人々が、50世紀かけて融合した多民族である。この長い歴史の間、インドと国を同じくしていたのは、700年間である。
言語　ウルドウ―語が国語であり、公用語・ビジネス用語は英語である。州によって（民族によって）言語が違い、いろいろな場面（祈りの際、他の州の人と話す時、等々）で言葉を使い分けている。

同国の地は、5000年の文化をもつ地域であり、インダス文明発祥の地域である。
インダス文明（7500BC－600BC）は世界四大文明のひとつ。その文明都市の遺構であるモヘンジョダロ遺跡はあまりに有名である。インダス文明の特徴として、農業では、小麦や綿が栽培され、ヤギや羊が飼育されていたこと、大きな倉庫があったこと、家は赤レンガ造りであったこと、港があり、造船も行っていたこと、計画都市であって、道路、水などもその整備を考えて街が作られていたことなど。当時の井戸・家の再現・食器・装飾品等のスライドを用いて説明された。何百という判子が発掘されたが、残念ながら、まだ誰も解読できていない。

ガンダーラ時代（500BC－1000AD）　ガンダーラはパキスタン北西部に栄えた仏教王国。
世界初の大学があったと思われる。中国・韓国・日本などの海外からお坊さんが仏教を学びに渡ってきたことから、昔からの日本とのつながりが考えられる。仏像誕生の地として、日本の仏教美術の源流として重要である。

世界遺産である「断食するブッダの像」1983年と2002年の2回、日本でのガンダーラ展で公開されたが、今は海外に出していない。（そのレプリカが鎌倉にあるとの紹介であった。）スライドの映像を示されながら、「顔を見ると、ギリシャの影響が感じられる」との公使の説明は、なかなかに興味深い。

アレクサンダー大王　遠征で現在のパキスタンの地まで来た。その際、多くの兵士がそのままパキスタンに残った。その一族は、ダンスが大好き　独特な文化をもち、チタラルという地域に住んでいる。最近　道路が整備されて観光客もいけるようになった。



モガル帝国時代（1526AD－1865AD　1526年バーブルによって創始された北インドの大王朝で、ことに16世紀半ばから18世紀初頭までが最盛期であり、その経済力は、中国に伍するものであった。インドのタージマハルや、ロータスフオール城塞、王妃のお墓、15万人がお祈りできる今から3世紀前に建造されたモスク、大王のお墓等々。見事な映像に魅入った。

現在のパキスタンの面積　日本の約2倍の面積を持ち、4州からなる。アラビア海に面し、イラン・アフガニスタン・インド・中国に国を接している。つまり、南アジアと中東、中央アジア地域を結ぶ地点に存在している。
地理的な特徴　北に沢山の山があること。カラコルム・ヒマラヤなど3つの山脈が連なり、8000m級の山が5つある。
気候　南北1800キロの距離があり気候もさまざま。山は多雨であるが、乾季の方が長い。四季があり、冬は12月から3月、春は3月の1、2週間、夏は4月から6月、7月から9月はモンスーン、10月から秋。
気温　南北で違い、55℃から－36℃にも及ぶ。このところの猛暑でバテ気味の身にとって55℃とは想像を絶するが、「湿度が低いので、扇風機で大丈夫」と公使は涼しげに話された。

パキスタン建国の父ムハマド・アリ・ジンナーは独立後１年で亡くなった。大きなお墓が建立されている。
国会　2院制で、議員数は計442人。その35％は女性議員。
スポーツ　クリケット、ホッケー、サッカーが盛んである。
主な輸入品は、車、鉄、石油等。輸出品は、綿、革製品、魚、果物等。
観光地　著名なモヘンジョダロ遺跡のほか、文化的都市であるラホール、歴史的都市であるタッター、2000万人の人口を擁する旧首都カラチなどの都市、インダス川沿いの農村地帯、カシミールの谷、カラコルム峯、南の砂漠を歩く駱駝から、夏の雪山・北の氷河まで、様々な景色をスライドで存分に楽しませていただいた。
名所旧跡への観光客のほか、シーク教の発祥地へ毎年世界中からの巡礼者が訪れるとのお話しであった。
人びとの暮らし　日常の衣・食・住、１カ月の断食（ラマダン）、近代的かつパワフルな都会の暮らしぶりと手作りの地方の暮らしぶり、カップルの出会いから結婚式の様子など、豊富な映像を駆使して紹介いただいた。何百人と思われる人々が何かにつかまり身体を寄せ集まっているスライドは、「何をしているのだろう？」と思ったら、「混んでいる電車の写真」との公使の言。なかなかに逞しい。

最後に　会場からの質問にお答えいただいた。

Ｑ１　インドとの状況について

Ａ．両国の関係はどんどんよくなっている。首脳会談あり、交渉もあり、問題は沢山あるが交渉で解決すべきだと思っている。（と外交官らしく回答された。）

Ｑ２　仏教美術について、今後日本で紹介される機会があるか

Ａ．　過去、日本で2回展示会を行った。2、3年後にまたやりたいと準備に動いているところである。

Ｑ３　公使の故郷、ラホールの豊かな環境の映像に感動したが。

Ａ．ラホールは歴史的な建物や大学等があり、人口1000万人ぐらいの大きな都市になった。昔のラホールが面白いと公使は個人的には思っておられるとのこと。

Ｑ４　女性について、社会人と専業主婦の割合はどうか？また、昼食は　どうしているか？

Ａ．　女性の5～6割は田舎に住んでいる。農村では女性たちも男性と一緒に重労働の農業をやっている。都会では、女性はどんな仕事にもついている。大学などでは、男性より女性が多い。努力し、よく勉強する。政府も女性の教育や役割について、前向きな政策を行っている。

昼食は、農村では家で作って畑で食べる。都会では、レストランやキャフエテリアなどでとる。

Ｑ５　ＩＴ化など、どのくらい進んでいるか

Ａ．全人口の７割から8割が携帯電話を利用している。都会では、皆インターネットを使っている。ＩＴ教育も盛んで、輸出の中でＩＴの割合が増えている。

Ｑ６　高齢化、少子化で、15年後には労働人口が不足する日本に、パキスタンの人も来ては？

Ａ．パキスタンは人口が多いので、中近東、米国（100万人以上）、イギリス等々600から700万人が海外に出ている。現在、在日パキスタン人は１万人ぐらいである。そのうちの8割ぐらいが中古車の仕事に従事し、70カ国に輸出している。車の商売に大きな役割を果たしている。日本に入国するのは非常に難しい。早期に、イミグレーションの問題を検討する必要があると考えている。

Ｑ７　公用語である英語を、一般の学校ではどの学年から教えるか、テレビ放送の言葉は？

Ａ．英語は一般的には小学校１年から、私立学校では幼稚園から英語を教える。国語であるウルドウ―語も外国語とする民族があるから最初は大変である。ロシア語、アジア語などは中学校から学べる。公使が子供のころは、テレビは１チャンネルだけだったが、今は60チャンネルもあり、いろいろな言語のチャンネルがある。

Ｑ８　ユネスコが寺子屋運動として取り組んでいる識字率は53％にとどまっているが、その原因や、田舎の暮らしぶりとの関係について

Ａ．田舎では学校がなかったり、少なかったりという問題がある。パキスタンでは、農業が大きな役割を果たしているが、学校をやめて親を手伝ったりする実情がある。政府は就学を推進している。女性については、教科書無料、教育費無料、教育費支給などの施策を進めている。10年から20年後には識字率が80％を超えること目指して努力している。

会場からの大きな拍手で公使のご講演が終了。アンケートでは、遠い国であったパキスタンが身近な国に感じられた等の感想が寄せられた。好評のうちに、本年度第１回の国際理解講演会を終えることが出来た。公使とご家族、協力いただいたパキスタン大使館、最後まで熱心にご参加いただいた皆様に深謝申し上げたい。

（国際理解講座委員会委員　山田摂子）

第一回世界の味文化紹介　「インドネシアの家庭料理」

日時：2010 年 7 月 24 日（土）12：00－15：30
会場：区立男女平等参画センター（リーブラ）4Ｆ、料理室
料理の講師：スプリ・ハンダリ（アリ）さん
お話：スハルノさん（アリさんのご主人）

インドネシアは 300 の民族やそれを越す数の言語が存在する多民族国家で、島が非常に多い広大な国ですが、国民のほとんどが姓を持たないとのことです。日本では「姓・名」は当たり前のことですので、同じアジアながら全然違う文化に驚きました。その広さと多民族からなるインドネシアでは、民族・地域性・気候の違いから、言語・食文化が地方によって異なるそうです。

今回は、アリさんとスハルノさんに、インドネシアから持って来て下さったスパイスを使って、ジャワ地方で作られているポピュラーな家庭料理をご紹介いただきました。

「ナシ・ゴレン」：日本でも知られている料理。チャーハンとスナック（えびせんべい）を一緒に食べるのが面白いと思いました。初めて見るトゥラシ（えびのペースト？えびのクサヤ？）はインドネシアのナンプラと言えるもので、強烈な香りでしたが、火を通したらとても良い風味に変わっていて、ナシ・ゴレンには欠かせないスパイスだとわかりました。

「グレ・チュミチュミ」：東南アジアでは、カレーには良くココナツミルクや色々なスパイスを使うのですが、今回はスハルノさんがお国から珍しいスパイスをもって来て下さいました。その一つが生レモングラスの茎(インドネシアでは葉は使わない)でした。イカのお腹に豆腐をまるごと一丁詰めて、ココナツミルクで煮る。体に優しく夏バテしないようなお料理でした。

「ガトガト」：インドネシア語で「まぜる」という意味だそうです。韓国語でいう「ビビン」です。大量のピーナッツと沢山のスパイスを油で揚げて、フードプロセッサーにかけて作るソースです。私たちは材料のすべてをフードプロセッサーにかける現代的な（？）作り方をしましたが、インドネシアでは石臼でつぶした手作りの「サンバル」ソースもよく使うそうです。その中に、にんにくや唐辛子を驚くほど沢山入れたのに辛くないのにびっくり！　同じ食材を使っても、文化によって、作り方によって、風味も味も違うことを教わりました。

「ブブルビジサラック」：さつま芋のデザート。デザートというよりも主食かとも思える程ボリュームのある美味しいお汁粉でした。

それからスハルノさんが持って来て下さったテンペ（大豆を発酵させて作る納豆のようなもの）とピーナッツを使った甘辛い品やピーナッツと雑魚を炒めた品は絶品でした。同じ大豆を発酵させて作るものでも国によって違います。それぞれに自分の国や地方に合う保存食を考えて作ったご先祖様は素晴らしい！

今回の世界の味文化紹介はキャンセル待ちが出るほど多くの申込みがありました。暑いときに辛い物を食べて汗をかいて暑さを乗り越える、これは美味しい料理と共に先祖からの素晴らしい贈り物です。作るのに時間をかけたので、試食する時間が足りない感じ（もっと沢山食べたかった！）でしたが、どれも大変なご馳走で楽しく終わりました。

インドネシアの食文化を一所懸命教えて下さったアリさん、スハルノさん、それに長い時間をよく我慢してくれたお嬢さんのアオゾラちゃん、そして 36℃を越える猛暑にも負けずに参加してくださった皆様、どうもありがとうございました。

（世界の料理委員会メンバー　柳賢美）

Happy Summer 咲かそう！ユースの交流の花

UNESCOユース・フォーラム in みなと 2010

日時：2010 年 7 月 25 日(日)　午後 1 時～午後 4 時 15 分
会場：港区立男女平等参画センター5 階ホール

港ユネスコ協会は、宇都宮ユネスコ協会のご協力のもと、今年初めて「UNESCO ユース・フォーラム in みなと 2010」を開催しました。フォーラムは、アジア各国からの留学生との交流を通じて、草の根の国際理解を深めようと企画され、中国、モンゴル、ロシア、キルギスからの宇都宮大学の留学生 17 名と、港区内外から約 40 名の方々が参加してくださいました。

フォーラムは、中国の女子学生呂さんとモンゴルの男子学生ガンオドさんの司会進行で、日本語の流暢な留学生の方々による、自分達の挨拶の言葉やお国の紹介、参加者との懇談、歌の時間まであって盛りだくさん。3 時間はあっという間に過ぎました。会の冒頭、留学生のみなさんが自分の国の言葉でのあいさつを教えてくれたなかに、「こんにちは」「ありがとう」の次に「友達」がありました。「友達」ってあいさつの言葉じゃないかもしれないけど、友達って言えば、みんな友達になれるよ、っていうメッセージなのだそうです。

中国　呂素素さんとモンゴル国　ガンオドさん

宇都宮ユネスコ協会　長門芳子会長

開会にあたり、港ユネスコ協会の中川副会長、宇都宮ユネスコ協会の長門会長より、それぞれご挨拶がありました。中川副会長は、このユースフォーラムの実行委員長としてご尽力してくださいました。宇都宮ユネスコ協会の長門会長は、港ユネスコ協会の設立期から現在まで、一貫して協会の活動にご尽力いただいているほか、「いっくら国際文化交流会」をご自身で創設し、会長を務めておられる、まさに草の根の国際交流の第一線で活躍なさっている、私達ユネスカンのお手本というべき、素晴らしい大先輩です。

港ユネスコ協会　中川統夫副会長

モンゴル国　ゾリゴーさん

モンゴルの国紹介では、男子学生ゾリゴーさんが、遊牧民の日常生活、その独特なジェスチャーや習慣についてお話をしてくれました。モンゴルでは「ごめんなさい」「失礼します」という気持ちを表すのに、右手を差し伸べて握手をするのだそうです。この習慣は日本でもなかなか抜けず、つい握手を求めてしまって驚かれるそうです。

モンゴル国　ボロルマーさん

モンゴルにとって日本はとても近い国のようで、日本の歌とスピーチの全国コンクールが、毎年開かれているそうです。2003 年度にそのコンクールで金賞を受賞した女子学生のボロルマーさんが、モンゴルの民族衣装で受賞曲「なだそうそう」を熱唱してくれました。

中央アジアのキルギス共和国からは、女子学生のアセリさんが、1991 年に独立した「マナス王の国」キルギスについて説明をしてくれました。多民族国家キルギスにとっても日本は身近な国のようで、「キルギス人と日本人は昔兄弟だった。肉が好きな者は中央アジアに残りキルギス人になって、魚が好きな者は海を渡って日本人になった」という伝説があるのだそうです。確かに、アセリさんは顔立ちも日本人と間違えそうなくらいよく似ています。国が独立してしばらくは経済生活は大変だったそうですが、そんな若々しい国から若い留学生が日本に来て一生懸命勉強している姿は、私達日本人にとっても、大きな励みです。

キルギス共和国　アセリさん

ロシア共和国からは、女子学生オリガさんがシベリア地方の生活について説明をしてくれました。バイカル湖周辺には、独特の文化や生活様式を持つ少数民族が暮らしていて、古来の宗教や習慣を今でも守り続けているのだそうです。太陽に当たると溶けてしまう淡水魚ゴロミャンカの話や、バイカル湖の神秘の島テングリィ島、保養地アルシャン、そしてオリガさんのお父さんも狩りに出かけるという、針葉樹林タイガの毛皮獣のことなど、たくさんの写真を交えながらのお話を伺っていると、行ったことも聞いたこともないような地域の人々の暮らしが、不思議と身近に感じられました。

ロシア連邦　オリガさん

中華人民共和国　褚さん

中国からは 2 名の女子学生、褚さんと黄さんが、内モンゴル自治区と上海市について説明をしてくれました。内モンゴル自治区の漢民族として生まれた褚さんは、モンゴル族や満州族、回教族など 49 もの民族が住む内モンゴル自治区の文化や生活を、「自分のアイデンティティ」と誇らしく説明していました。黄さんは、上海万博に沸く上海市と上海料理について生き生きと説明してくれました。その様子は、まるで上海そのものが乗り移ったかのようにエネルギッシュ。ふたりとももっともっと伝えたいお話があったようで、時間の制限があって本当に残念でした。

中華人民共和国　黄さん

休憩を挟んで、3 班に分かれてグループディスカッション。それぞれのグループに順番に留学生が参加して、自国や日本での生活や将来の夢について、自由に語り合いました。モンゴルのゾリゴーさんは工学部の学生ですが、卒業したらモンゴルに帰って自分の国の発展の役に立ちたい、と目を輝かせていました。また、勉強やアルバイトに多忙な日本での留学生活ですが、恋人や仲間と遊んだりして、楽しむ時間もちゃんとあるようで、安心しました。ディスカッションの終わりには、各国の留学生の代表からのコメントの発表がありました。

ロシア連邦　アントンさん

港ユネスコ協会　清水軍治副会長

そしていよいよ最後のプログラム、留学生のみなさんが各国語で披露する、歌のコーナーです。「世界にひとつだけの花」は、慣れない日本語の歌で苦戦した留学生もおられたでしょう。会場からも、サポートの合唱の声が聞かれました。「幸せなら手をたたこう」は、日本語、英語、中国語、モンゴル語、様々な言語が飛び交い、大いに盛り上がりました。アコーディオン演奏は、港ユネスコ協会副会長の清水軍治さん。清水副会長は、プログラム開始前から、素敵なＢＧＭで会場を盛り上げてくれました。続いて、港ユネスコ協会高井光子会長の閉会のご挨拶で、会は無事に終了しました。

港ユネスコ協会　高井光子会長

ここで、宇都宮ユネスコ協会に届いた、留学生の皆さんからの感想をご紹介します。

中国・林松傑さん「すごく楽しかった。はじめて東京へ行ったので、わくわくでした。各国留学生の自国紹介プレゼンテーションを聞いて、自分の国のことだけでなく、ロシアやモンゴルなどについても勉強になった。グループディスカッションの時、日本の方々と話し合って、いろいろ交流できて良かった。」

中国・陳佳敏さん「様々な人と出会い、情報交換だけでなく、もっと自分の国を認識し、日本に対して少し理解できるようになった。留学生活でのいい思い出を作れた。」

中国・瀋夢露さん「フォーラム担当者の中に中国に何度も行った方がいて、参加者との会話がとても楽しかった。美味しい昼食とお土産まで頂き、すごく親切感を覚えて嬉しく感謝している。」

中国・尹成輝さん「今回参加できて本当に良かった。日本留学中に、このような国際的なボランティア活動にもっと参加したいです。これからは、チャンスがあればいつでも絶対に参加しようと思っています。準備して下さったすべてのみなさまに感謝しています。」

中国・黄佳蓓さん「グループディスカッションで、参加者のみなさんとコミュニケーションして、私に対して留学のいろいろなことを聞いてくれて嬉しかったです。外国人だけでなく、人間としてもやはりこのように直接対面して交流することは大切と思います。」

中国・褚 冠楠さん「参加でき、本当に嬉しかったです。日本では殆ど情報のない出身地・内モンゴル自治区について参加者のみなさまに理解して頂くチャンスを頂いたと頑張り発表の準備をした。そして、自分にとり内モンゴル生まれのアイデンティティを再認識することができた。このような機会を与えて下さった長門会長と高井会長に心より感謝しています。ご指導・指示して下さった宇都宮・港ユネスコ協会担当者、熱心にグループディスカッションに参加された参加者、フォーラム準備と発表に頑張った留学生、みんなが協力し合って得た成果と思います。私の人生の最高の思い出です。『本当にありがとうございました。お疲れさまでした。』と心から言いたいです。今後のユネスコ活動の発展を祈り、自分の限りある力を尽くしたいと思います。」

中国・呂素素さん「参加することができて本当に良かったです。モンゴルのガンオドさんと 2 人で総合司会を担当させていただき嬉しかったです。 朝 8 時、宇都宮駅に誰も遅れることなく留学生 17 名が集まり東京に出発した。初めて東京に行く留学生も居てみんなわくわくでした。 10 時半会場に着くと港ユネスコ協会のみなさんがいろいろ準備をしている姿を見て『私たちも頑張るぞ！』という気持になった。　事前にリハーサルをして、いよいよ本番を迎え、みなさんの温かいサポートもあって司会は無事終了した。4 か国の留学生の自国紹介は素晴らしいプレゼンテーションだった。　その後のディスカッションも盛り上がり本当に良かったです。このユースフォーラムで大きな役割は、留学生と地域の人たちがお互いに交流できたことです。交流の場を作り、地域の人たちにとっては世界を知るきっかけとなり、また、外国人留

学生にとっても日本人を知るきっかけにもなった。人と人との出会い･つながりから、社会と世界の関わりも深める。最後に、宇都宮ユネスコ協会と港ユネスコ協会のみなさまに感謝いたします。」

モンゴル・ゾリゴーさん「参加できたことを本当に嬉しく思っております。港ユネスコ協会のみなさまのお陰で東京での充実した一日も過ごしました。このようなチャンスを頂いた宇都宮・港ユネスコ協会担当者のみなさまに心より感謝します。ありがとうございました。フォーラム実行委員としては、工学部情報専攻の専門を生かしパンフレットを作成しました。それからモンゴル紹介のプレゼンもしました。日本留学中の貴重な体験となり、ご指導いただいたすべてのみなさまに感謝します。これからも頑張ります。」

モンゴル・ハマさん「本当に楽しい一日でした。みんなと楽しい思い出ができました。たくさんの友達もできました。1 年間の交換留学が終わり、9 月 24 日、貴重な思い出を胸に帰国します。ありがとうございました。帰国しても「ウランバートルいっくら」で国際ボランティアとして頑張ります。」

モンゴル・ザヤさん「楽しかったです。これからもボランティア活動に参加していきたいと思いました。『ユネスコ』については、名前だけ知っていましたが、今回ユネスコの活動について知識を得ました。」

モンゴル・アヌージンさん「とてもいい思い出ができました。またユネスコに参加したいと思います。みなとユネスコのみなさんは、とても親切な人ばかりでした。」

キルギス・アセリさん「自分の国を紹介することができてとても嬉しいです。言語が違っても文化の点では共通したところがあり、楽しい交流の一つでした。ディスカッションの時、みんな親切で、文化や言語に関心を持って、いろいろなことを聞いてくださいました。日本に留学している間にできるだけ積極的に、このようなチャンスを逃さないように、新しいことを勉強しながら、キルギスのことを多くの日本人の方々に理解していただければと思います。」

港区に在住している人口の一割が外国人とはいえ、身近に接しあい、コミュニケーションを図る機会はなかなかないもの。港ユネスコ協会は、これからもこのようなユースの国際交流の機会を、積極的に広げていけたらと願っています。

最後になりましたが、このユースフォーラムは宇都宮では 7 年目。すべて留学生の皆さんの自主企画により行われます。今回はじめて港区での実現に関わられた委員会の皆様、本当にお疲れ様でした。参加者の皆様、ありがとうございました。またの機会のご参加を、ぜひお待ちしています。

（広報ブレティンインターネット委員会　常任理事　島田和美）

ユースと外国人のための
浴衣着付け体験教室

日時：2010 年 6 月 26 日（土）13:00～16:00
会場：港区立生涯学習ｾﾝﾀｰ　203 号室（和室）
着付け講師：原口早苗さん（会員）ほか

私は浴衣を着る機会は今までもありましたが、自分ひとりで着るという機会がなかったので初めての経験でした。

まず、先生の着付けの仕方をよく観察して、それから実践しました。私は浴衣をお借りしましたが、紺色の素敵な模様の浴衣でした。はじめに、浴衣の裾を足首のところであわせて固定をしました。そして、中心部分でしっかりと固定をして、紐で結びました。こうした一つ一つの作業にも心を込めてきちんと行なうことが最終的な仕上がりを美しいものにするものだと知りました。

最初は先生に指導を受けながら一通り着てみて、その後自分ではじめから着ていきましたが、中々思うように「おはしおり」などがまとまらずに苦労しました。最後の帯の結びは蝶々やリボンなど様々に結べることを知り、もっと深く学びたいと思いました。

浴衣を着た後は、全員で集合写真を撮りました。お抹茶とお菓子を頂きながら自己紹介をして、参加した数名の外国人留学生や他の参加者とも交流を図りました。

夏の風物詩の浴衣を自分で着ることは日本人の心、「和」を知る上で大切なことだと再認識しました。貴重な経験をさせていただき、どうもありがとうございました。　（ユース活動委員会　井出由紀子）

「新入会員を囲む会」　成功裏に終了！

日時：2010年６月９日（水）18：30～21：00
場所：生涯学習センター305号室及び当協会事務局

当協会に過去１年間に入会された新入会員の方々に、協会の歴史、現状、更に未来像をより深くご理解いただき、併せて新旧会員相互の交流と親睦を深めるための大切な事業です。中川副会長の司会でスタート切りました。

第１部　オリエンテーション　（305号室、新入会員10人を含めて34人が参加）

最初に、高井光子会長から力強い挨拶がありました。「当協会は設立以来、10月で30年目に入ります。設立のきっかけは、区長や教育委員会から国際都市にふさわしい国際交流活動をする団体の設立要請があったことです。『港区らしい活動をする組織』をめざして財界人、文化人、教育関係者、地元で活動している方々などが集まって動き始めました。」と当協会の生れた経緯から、29年にわたる諸活動の流れ、更に今後の活動の方向性などについてお話いただき、「皆様もここで出会いを楽しみ、活動の面白さを体験していただきたいと思います。」と結ばれました。

続いて、棚橋征一副会長から港ユネスコ協会の概要について、説明がありました。「当協会は国際的なボランテイア組織として、”地の利”、”人の利”に恵まれている。港区の歴史を見ると、江戸末期から欧米列強の公館が開設され、国の近代化、国際化を担ってきた地域である。昨年末のデータによれば、都内145ある大使館の内、過半数の75が港区にある。区内在住の外国人比率は9.6%。是非、国際色豊かな当協会の活動に参加して、これを実感してください。」

その後、各委員会の具体的な活動状況について、委員長（または担当役員）から、書面またはパネルを用いて、熱のこもった説明がありました。新入会員の方にとっては、これが今後どの分野で活動するか決めるきっかけともなると思います。

第２部　懇親パーテイ　（事務局にて）

会場を変えて、今度はリラックスムードの中で懇親会。秋山雅代常任理事の司会、松本洋副会長の乾杯の音頭でスタートしました。狭いながらも、家庭的雰囲気に満ちた我らの事務局が会場。ムードを盛り上げてくれたのは、限られた予算の中で担当の委員会があれやこれやと知恵を出し合って、用意した盛り沢山な食べ物や飲み物。お皿を手に、あちこちで話の盛り上がったグループが出来上がりました。

一息ついたところで、お待ちかねの新入会員から始まる自己紹介。時間内で話す人、熱が入って時間オーバーする人など、各人各様に自己をアピールしました。

最後は恒例の清水軍治副会長のアコーデイオン演奏による全員参加の大合唱。懇親会は最高潮に盛り上がりました。気配り満点で用意された食事と全員合唱で、参加者は熱い一体感を感じとっていただけたことと思います。

「囲む会」成功に向けて、準備に心を尽くして下さった方々に心より感謝いたします。
当協会発展に皆で力を合せましょう！

（会員開発委員会担当常任理事　友金　守）

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

琳太くん、お誕生おめでとう！

ブレティン第114号（2008.11.18発行）でご紹介しましたユネスコ・カップルの篠田健司さん・敦子さんに７月に元気な男児が誕生しました。おめでとうございます。「ベビー会員」なんていうのがあれば、早速入会してほしいですね。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（常任理事・事務局長　水野隆）

第 14 回 MUA サロン　「私の自然染め 2000 点」

日時：2010 年 7 月 7 日（水）18:30－21:0
会場：港ユネスコ協会事務局
お話し：江原音子さん

新会員の江原さんは東京都式根島で生まれ育たれました。現在は稲城市に住み、式根島と行ったり来たりされています。子ども時代、式根島で伊勢えび漁に使う網を「モッコクの樹皮」を使って染める作業を手伝われたので、染色の技が身についておられました。

「式根島開島 100 年祭」に向けて、その伝統の手法を使って、100 点の染物を作ってみようと思い立ったのが、素朴な草木染を始めたきっかけだそうです。

島に自生している草・木・花、海の植物、畑で育てた植物の実や根などを使って、媒染剤は全く使わずに、自然の色に染めているので、ご自身では「自然染め」と呼んでおられます。

「身近にある草・木・実・根・花など何でも煮る。その煮詰めた液で染めているだけです。誰でもできますよ。染料に使った後の材料の残り滓は、式根島に送り土に戻しています。それらは肥料になるし、それで育った作物には虫もつかないし病気にもならない。自然の力をあらためて感じます。」とおっしゃいます。

「今では、私が染物をしていることを知った方々がいろいろな植物を持ってきてくれるようになり、想像を超えるほどの材料が手に入るようになりました。皆さんの好意で出来た染物なのでどの作品も手放せなく、すべてを手元に残しているので、2000 点どころか 3000 点くらいもあります。」とのことです。

会場に藍、うこん、紫根草、くちなしの実、紫いも、茜などの染の材料となる実物を持参し、見せて下さいました。また、染めた帯揚げ、バッグ、草履、帯、子供のドレス、被布、ポケットチーフなど数多くの作品を披露して下さいました。すべての色は自然そのもので、淡く柔らかく何ともいえない色合いです。

「使う生地や量・温度・時期によって染め上がりの色は違ってきます。島で学んだすべてが今役立っています。どこかに染めに関する展示会があれば必ず見に行きます。現在、媒染に砂糖を使ってみようとサトウキビを植え育てることにチャレンジしています。」とのこと。草木染めの話をされる江原さんはとても生き生きと輝いておられました。

（会員開発委員会委員長　成瀬成子）

港ユネスコ協会の支援活動

2010 年度の支援対象：**「ミンダナオ子ども図書館」**

フィリピンのミンダナオ島で活動する**「ミンダナオ子ども図書館」は**、児童文学者の松居友さんが設立し、現地法人として合法的に認可された団体です。主に次の活動を行っています。

（１）子どもの成長と発達を支援する図書館活動
（２）貧しい子どもの生活と医療を救済するための、医療プロジェクト、スカラシップ、子どものシェルター、孤児施設などの支援活動

2005 年 10 月の当協会の国際理解講演会で、松居友さんに「テロと戦闘の続くミンダナオでの医療・図書館活動報告」というテーマで講演をしていただき、大きな感動を呼びました。何人かの会員はその後、個人的に支援を続けています。

港ユネスコ協会として、2010 年度の支援対象として「ミンダナオ子ども図書館」を選びました。

ミンダナオ島は、フィリピンの南部の大きな島で、経済的に遅れた地域です。アメリカ資本が大農場の形で良い土地を所有していて、そこで働く日雇の貧しい農民と、条件の悪いところに追いやられた山岳民族とイスラム教徒の人びとが半数以上を占めています。反政府軍組織の活動が活発で、今も政府軍との戦闘が起こっているような土地ですので、子どもの 70%は貧しくて学校に行けないと言われ、出生記録すらないケースが多いといわれています。

皆様のあたたかいお気持ちによって、ミンダナオ島の子どもたちに希望が生まれます。
どうぞ募金活動へのご協力をお願いいたします。
郵便振込口座：００１９０－４－７３７３２　港ユネスコ協会コーアクション口

立花さんを偲んで

事務局の立花良子さんが6月29日急性心不全で亡くなりました。あの無垢の笑顔が見られなくなって、淋しいかぎりです。会員として長年活動される一方で、事務局員としても20年近く多大な貢献をして下さいました。決して出しゃばることなく、自分を見失うことなく、忍耐強く、静かに会員一人ひとりの性格を見ながら、会員どうしがスムーズな関係が保てるよう、そして、みんなが気持ちよく活動できるように気配りをして下さっていました。交流会にはいつも手作りの沢山のおはぎと、手の込んだ美味しい料理を持参して下さいました。立花さん、温かいお人柄はお幸せなご家庭の反映だったのですね。得がたい友を亡くして、とても心もとなく感じています。港ユネスコ協会のこれからを見守って下さいね。　（会長　高井光子）

「もしもし、立花ですが、家内が亡くなりました。」ご主人からこの電話を受けたときほど、我が耳を疑い、聞き返したことはありません。検査入院とのことで、また元気になって事務局でお会いできると堅く信じておりましただけに、残念極まりありません。貴女とは、私が事務局勤務中の13年余りご一緒でした。私は貴女のことを「校正の達人」と呼んでいました。それほどに、的確な校正にどれだけ助けられたか分かりません。探究心が誠に旺盛で、勉強家でした。また、何年か前のことですが、一枚の絵手紙をもらいました。それは我が家で採れた葉っぱ付きの「枇杷」を見事に描いたものでした。いつも裏方で支えてくれた貴女の生き方に、どれほど感銘し、刺激を受けたことでしょうか！安らかにお休み下さい。合掌

（常任理事　友金　守）

事務局便り

《今後の行事予定》

- ☆　9月26日（日）終日　　日帰りバスツアー（行き先：足利学校、あしかがフラワーパーク）
- ☆　10月9日（土）～10日（日）　みなと区民まつり（港区芝公園一帯）
- ☆　11月5日（金）19:00～　　韓国伝統音楽・舞踊公演「サルプリ」（草月ホール）
- ☆　11月17日（水）18:30～　　国際理解講演会「ジャーナリストが見たアフリカ」（生涯学習センター）
- ☆　11月27日（土）12:00～　　世界の料理「アルゼンチンのクリスマス料理」（男女平等参画センター）
- ☆　11月（日時未定）　　大使館訪問（予定：パキスタン大使館）

《ご寄付ありがとうございました》

- ☆　協会の平和基金口座へ　　：港区テニス連盟様より　80,000円（2010.7.30）
- ☆　「ミンダナオの子ども図書館」へ　：国際理解講演会（パキスタン）の会場で　7,700円（2010.8.5）

《事務局訪問》　次の学校のみなさんの訪問を受けました。

- ☆ 5月13日（木）　岡山県赤磐市赤坂中学校から生徒のみなさん6名
- ☆ 5月19日（水）　宮城県仙台市袋原中学校から生徒のみなさん4名
- ☆ 6月8日（火）、11日（金）　都立三田高校から藤村先生、酒井先生と生徒のみなさん30名

《事務局の新体制について》

立花良子さんのご逝去に伴い、一度事務局を離れた笠原正子さんに復帰してもらうことになりました。
その結果、火曜～木曜は深川忍さんと水野、金曜日は笠原さんと水野が勤務しております。（事務局長　水野隆）

港ユネスコ協会事務局　（火～金　10:30～17:30）
〒105-0004　東京都港区新橋3-16-3　TEL 03(3434)2300　FAX 03(3434)2233
電子メール：minato-unesco@nifty.com　ウェブサイト：http://minato-unesco.jp/

■編｜集｜後｜記■　◇★ 夏から秋は、港区内各地の神社で例大祭が開催され、神輿が町内を渡行します。今年はこの暑さですから、担ぎ手さん達の体調管理も心配ですね。街でお神輿を見かけたら、激励しましょう！（島田）　◇★ 夏の全国高校野球大会は沖縄の興南高校が春夏連覇を果たして閉幕した。毎年高校野球の終わりと共に暑い夏も終盤との感を強くするが、今年はまだ暑さが続くようだ。そろそろ涼風が恋しい。（須田）　◇★ 先日、訪日中のフィリピン残留日本人二世の皆さんを招き、「国籍とは何か」を考える講演会に出てみた。今後、益々、扱いがむずかしくなる移民問題ともからみ、大変示唆に富む内容であった。（棚橋）　◇★ この夏の猛暑はどうやら海の中の生物にまで影響を及ぼしているようです。海水の温度が例年以上に上昇して、魚も夏バテのせいか、活性が上がるどころか、食欲も無いようで、なかなか餌に食いついてくれません。釣果が出ない日本海への釣行の帰り、信州で安くて新鮮な野菜を沢山買いこんだのがせめてもの慰みでした。（水野）　◇★ NHKラジオ「夏休み・子ども科学電話相談」で、幼稚園の女の子が「お祖母ちゃんがお空の上に行ったの。でも、お仏壇の中にも、お墓の中にも居ると言うの。本当はどこにいるのですか。」と質問。胸が詰まりました。（高井）